

松本三之介著

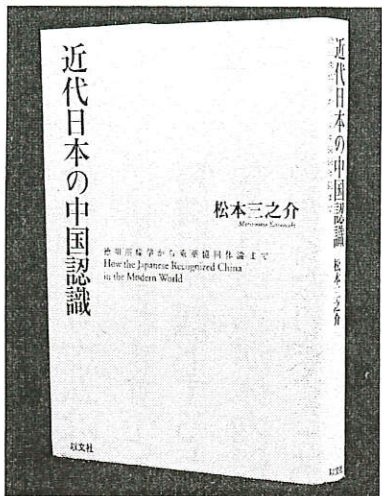
近代日本の中国認識

評・細谷 雄一 (国際政治学者)
慶応大教授

日中国交正常化四十周年を前にして、日中関係の緊密化が重要な政治課題となっている。しかしながら両国間の関係はどこかきこちなく、また国民感情は相互に不信感を示して

蔑視でなく理解こそ

争での勝利の後には、国家形成能力が欠如する中国を蔑視し、自ら中国大陸へと帝国主義的進出に乗り出す。他方で、中国の民族主義への深い理解を示した吉野作造や石橋湛山、三木清への著者の共感は深い。彼らは、日本の帝国主義的行動を批判して、アジアでの民族主義を支援する必要を説いた。彼らが苛立っていたのは、日本人が中国国民の感情を理解しないことであった。中国に対して「軽蔑する方法」に代わる「理解の方法」が求められているのだ。



以文社 3500円

いる。いったい問題の本質は何なのだろうか。それを理解する一つの手がかりは、日中関係の「基層」ともいえる近代日本の中国認識の歴史を辿ることであろう。

本書は、日本政治思想史研究の大家によってまとめられた、日本の対中認識の歴史である。市民講座の講義を原型としているから、実に読みやすい。江戸時代の儒者たちの中国観から始まり、福沢諭吉の「脱亜論」や岡倉天心の「アジア観」を経て、三木清の「東亜協同体論」へ至る。それらが鎖のように繋がりに時代精神を生み、日本の対中政策をつくっていった。

それでは、近代日本の中国観の底流にはどのような特質が見られるのか。著者はそこに、中国を「固陋の国」と蔑視する日本人の姿勢を見る。道徳の国として慕われた中国がアヘン戦争で西洋の軍事力の前に敗れた姿は、日本の知識人にとって巨大な衝撃であった。日清戦争での勝利の後には、国家形成能力が欠如する中国を蔑視し、自ら中国大陸へと帝国主義的進出に乗り出す。他方で、中国の民族主義への深い理解を示した吉野作造や石橋湛山、三木清への著者の共感は深い。彼らは、日本の帝国主義的行動を批判して、アジアでの民族主義を支援する必要を説いた。彼らが苛立っていたのは、日本人が中国国民の感情を理解しないことであった。中国に対して「軽蔑する方法」に代わる「理解の方法」が求められているのだ。

◇まつもと・さんのすけ 11926
年、茨城県生まれ。東京大名誉教授。主な著書に『吉野作造』など。